

# “the new womanly man” としてのブルーム

## ブルームの「生きづらさ」の再解釈

安井 誠

### 1. はじめに

ブルームのジェンダーアイデンティティに関しては、これまでも「女っぽい」や「両性具有」など様々な評価がされてきたが、ブルームの「男性性」、より具体的には「女性的男性性」と「生きづらさ」を関連させて述べたものはあまりない。本シンポジウムでは、ブルームの「女性的男性としての生きづらさ」に着目し、その解釈について「男性学」のアプローチから若干の考察を加えた。

### 2. 1904年6月16日(木)のブルームの一日

ブルームは1904年6月16日(木)、数多くの人たちと出会ったり会話を交わしたりして非常に濃密な一日を過ごすのだが、心の底から笑ったり楽しんだりするといったシーンは見られない。むしろ、孤独感や疎外感を感じているように見える。実際のところ、ブルームは『ユリシーズ』に登場するほとんど全ての男性から疎ましがられてもいる。第6挿話では知人たちから「能無し」と形容され、第7挿話では新聞社の編集長から「地獄へ落ちろ」と伝言される。これらからも分かるように、ブルームはダブリンナーたちから受け入れられてもらえておらず、なおかつ気心の知れた親友と呼べる友達もいない。ある種の「生きづらさ」を感じながら過ごしているように思える。

### 3. 男性学から見たブルームの「生きづらさ」

ブルームの「生きづらさ」について考えるにあたり、「男性学・男性性研究」の視点が示唆に富む。社会学者の田中俊之は、男性の「生きづらさ」を以下のように表現している。

男性学は男性が男性だからこそ抱えてしまう悩みや葛藤を対象としている。悩みや葛藤は「男性問題」とまとめることができる。(中略)「男性問題」を「生きづらさ」と言い換えた方が適切かもしれない(田中俊之, 2019, 34-35)。

これをブルームに当てはめて考えてみると、「ブルームが男性だからこそ悩みや葛藤を抱えてしまう(生きづらさを感じてしまう)」とすることができるのではないか。

アメリカの社会学者 Michael Messner は、男性の「生きづらさ」について考える際に持ち合わせるべき視点について主張している(Messner, 1997, 3-8)。例えば “Institutionalized Privilege” (男性の制度的特権) という視点である。当時のダブリンは男女の二元論がはっきりしており、外に出て社会的な交流をするのは主に男性の役割であった(Boone, 1982, 68)。そのような制度的特権を果たすことが期待されているブルームなのだが、男同士の交流は良好とは言い難く、かえってその特権が仇となり、家に残されたモリーが不義を犯すのである。

Messner はまた “Differences and Inequalities Among Men” (男性内の差異と不平等) という視点も主張する。これは、同じ男性内でも平等に享受できるものではないという考え方である。ブルームは他のダブリンの男たちと比べると、明らかに差別的な扱いを受けている。例えば第12挿話、ホモソーシャルな関係を築き維持するための装置として機能しているパブにおいて、「市民」は “Do you call that a man?” と言い、ジョーは “I wonder did he ever put it out of sight” と付け加える (12. 1654-1655)。この後ブルームは「市民」からビスケットの缶を投げつけられパブから追いやられるが、これはブルームが彼らから「男」として認められていない証拠でもある。

### 4. “the new womanly man” としての「生きづらさ」

ブルームはディクソンから “the new womanly man” (女性的男性) と診断されるのだが、前述の田中の定義に

当てはめると、「ブルームは女性的男性だからこそ生きづらさを感じている」と言うことができよう。

ブルーム自身も、自身の「女性的男性性」については自覚しているようだ。それは、かつてモリーの服を着てみたことがあるという告白や、「母親になりたい」という願望を見せていることから分かる。そのような性的マイノリティにも属しえるブルームは、自分のジェンダーアイデンティティについてはモリーや他の人には明かしていない。ブルームは「本当の自分」、つまり自分の女性的男性性を誰にも伝えられていないのだ。誰にも伝えることができない悩み、孤独感が、ブルームの「生きづらさ」の理由の一つであるように思える。

ブルームはこう主張する。

— Of course, Mr. B. proceeded to stipulate, you must look at both sides of the question. It is hard to lay down any hard and fast rules as to right and wrong but room for improvement [...] (16. 1094)

男女が全く違う極に存在している当時のアイルランドの社会が、まさに二元論を象徴している。「男性か、そうでなければ女性か」。「父親か、そうでなければ母親か」。「男性は男性らしく、女性は女性らしくないといけない」。このように、人はそれまでの経験に従って物事をカテゴリー化する。そしてそのカテゴリーからあぶれた人は「男(女)でない」と判断される。そのような中、ブルームは「私の中の女性的男性性も見てほしい、分かってほしい。男か女かという二元論的な基準で私を判断しないでほしい」と私たちに訴えているような気がしてならない。

## 5. まとめ

ブルームの SOGI についてはゲイ説をはじめとして様々な論が言われているが(例えば Valente, 1998, 1-16)、ブルーム自身は明確にはカミングアウトしていないため実際のところは分からない。より大事な点は、ブルームは「女性的男性」として、当時のダブリンにおいて「生きづらさ」を感じていたであろうと理解・共感することではないだろうか。そして、そのような人物を描いたジョイスの、心の奥底にある根元的な優しさ(ヒューマニズム)を感じることはなかろうか。

Budgen は、「ブルームは他のダブリンの人間よりも 100 歳ほど年上のように感じられる」と述べている(Budgen, 1960, 275) が、「100 年ほど時代の先端を行っている」という見方はできないだろうか。奇しくも『ユリシーズ』出版後 100 年後の今日、アイルランドでは同性愛を自認する首相が誕生している。モダニスト作家として女性的男性を不朽の名作の主人公に仕立てたジョイスは、まさに「革命的」であったと言えるのではないだろうか。

## 主要参考文献

- Boone, Joseph Allen. “A New Approach to Bloom as ‘Womanly Man’: The Mixed Middling’s Progress in ‘Ulysses’”. *James Joyce Quarterly*. University of Tulsa, 1982.
- Budgen, Frank. *James Joyce and the Making of Ulysses*. Indiana University Press, 1960.
- Messner, M. A. *Politics of Masculinities: Men in Movements*, Sage Publications, 1997.
- Reizbaum, Marilyn. “The Jewish Connection, Cont’d”, *The Seventh of Joyce*, Ed. Bernard Benstock. Indiana University Press, 1982.
- Shuwarze, Tracey Teets. “‘Do you call that a man?’: The Culture of Anxious Masculinity in Joyce’s ‘Ulysses’”, *Masculinities in Joyce: Postcolonial Constructions*, European Joyce Studies, 2001: 113-135.
- Valente, Joseph. “Joyce’s (Sexual Choices): A Historical Overview”, *Quare Joyce*, University of Michigan, 1988.
- 金井嘉彦・吉川信・横内一雄編 『ジョイスの挑戦—「ユリシーズ」に嵌る方法』言叢社、2022 年。
- 川口喬一 『「ユリシーズ」演義』研究社出版、1994 年。
- 田中俊之 「男性学は誰に向けて何を語るのか」 『思想現代』2 月号第 45 巻第 2 号、青土社、2019 年。
- セジウィック, イヴ・K. 『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀澤美由紀訳 名古屋大学出版会、2019 年。